

純白の花嫁は義弟に墮とされて
——婚約者の隣で背徳に溺れた私

夜果堂書房／高瀬ザクロ

第一話

フラワーショップの店内に、かすかなバラの香りが漂っていた。

カウンターの奥で高木美雨はリボンを結びながら、花束を仕上げていた。ピンクのガーベラと白いバラを合わせた小ぶりな花束。

仕上げにかかる霧吹き音が、静かな午後の空気を切る。

「いやあ、今日の送別会、楽しみだね」

にこにことした同僚の声に、美雨も思わず頬を緩めた。

「ほんとに。ありがとうございます」

自然と口元がほころぶ。

「式の直前だと、食べすぎてドレスが入らなくなったら困っちゃう

でしょ？ちょっと早いけど、今日はみんなで楽しもうね」

結婚が決まってから、職場では祝福の声ばかりが飛び交った。

美雨はそのたびに微笑み、幸せそうに頷いていたが、胸の奥には、どうしても埋められない小さな空洞があった。

冬馬と付き合い始めて一年。

最初の頃に一度、身体を重ねたきり。

それ以来は抱きしめてもらうことすらなく、頬に軽く触れるようなキスだけで終わってしまう。

宇高冬馬。

優しく、誠実で、誰もが羨むような美雨の婚約者。

けれど、美雨の肌は彼の温もりを、もう長いあいだ感じていない。

送別会は、笑い声と酒の匂いに満ちていた。

ビールにワイン、日本酒まで、次々と注がれ、気づけば美雨は頬を紅潮させていた。

普段なら真っ直ぐに家へ帰るはずが、酔いに任せてタクシーを拾っていた。向かった先は冬馬のマンション。

ポーチから合鍵を取り出すと、胸が高鳴る。

（会いたい……今日は、どうしても）

ドアを開けると、リビングの灯りが柔らかく迎えた。

そこに冬馬がいた。

その輪郭が酔った美雨の視界で揺れ、胸が締め付けられる。

「……冬馬……今日はどうしても会いたかったの……」

名前を甘く呼んだ瞬間、無言のまま抱き寄せられた。

唇が重なる。強く、深く、舌を絡め取る濃密なキス。

息が詰まるほど長く、唾液を交換しあい、喉の奥まで侵入してくる舌に、美雨は全身を熱くさせられる。

「んっ……あっ……」

その口づけは唇だけでは終わらない。

顎から首筋、鎖骨、乳房、腹部へと、途切れなく落ちていく。

肌が唇でなぞられるたび、全身が火照っていく。

そして、秘部。

クリトリスを唇で捕らえられ、吸い上げられた瞬間――

「ひああっ……あああっ……そこ……!!」

剥き出しになった美雨のクリトリスを唇で吸い上げ、舌で転がし、吸いつくようにしゃぶり上げていく。

「んひいっ……ああああ……っ！」

びちゃびちゃと濡れた音が部屋に響いた。

舌先が小さな突起をぐりぐりと押し潰し、時に軽く噛む。

そのたびに、美雨の身体はびくんっと大きく跳ねた。

「……そんなに……っ、いやっ……おかしくなる……！」

潤みきった割れ目からは愛液があふれ、ソファを濡らしていく。

それでも冬馬は止まらない。

吸って、舐めて、音を立てて啜る。

「ちゅぶっ……じゅる……っ、ん……っ」

淫靡な水音が耳を犯し、美雨の全身に甘い痺れが走る。

美雨は堪えきれず、ソファの背に爪を立て、脚を震わせた。

舌がクリトリスを強く吸い込み、根元を舌先で弾かれた瞬間――

「……っ、いつ……いつ……っ！」

腹の奥から熱い奔流が突き上げ、快感が連続して襲う。

それでも冬馬は唇を離さず、さらに舌を押し付ける。

「ひっ……ひあっ……っ、もう……だめええっ！」

絶頂の余韻に追い討ちをかけるように執拗にクリトリスを転がす。

美雨は自分の意思を超えて、快楽に打ち碎かれ、蜜を流し続けた。

「いやっ……もう、イク……また……っ！」

絶頂を迎えるたび、背中が大きく仰け反り、涙がこぼれ落ちた。

「……冬馬……うれしい……っ」

息も絶え絶えに、美雨は囁いた。

大きな掌が両膝を掴み、ぐいと開かされる。

羞恥に震える割れ目へ、怒張した肉棒が押し当てられた。

「ん……っ！」

熱を帯びた先端が膣口をなぞり、蜜がぬるりと絡む。

次の瞬間——容赦なく腰を突き入れられた。

「んんんっ……！ あっ……あああああっ！」

狭い膣壁が無理やり押し広げられ肉棒の形にぴったり吸いついた。

子宮口までを一瞬で貫かれた衝撃に、美雨の全身が跳ね上がる。

「ひあっ……っ、んんんっ……！」

冬馬は荒々しく腰を打ちつけ、美雨の奥を叩き続けた。

肉と肉がぶつかる湿った衝撃音。

ずん、ずん、と深く突き込まれるたび、膣奥で甘い火花が散り、美雨の背は弓なりに反り返る。

「やつ……っ、あっ……あああああっ！」

両胸を鷲掴みにされ、乳房が指の間で潰される。

硬く尖った乳首を親指でこね回されると、刺激が子宮へと直結し、さらに快感が増幅する。

「う……うれしいっ……ずっと、こうやって激しくしてほしかったのお……っ！ 冬馬あ……」

膣壁はきゅうきゅうと収縮し、冬馬の肉棒を締め付けた。

その度に奥を挟まれ、美雨は理性を失って絶頂に叩き込まれる。

「んああああっ……！　だめ……また……イツちゃう……っ！」

絶頂の余韻の中でも律動は止まらない。

美雨は声を震わせながら、果てるたびに何度も冬馬の名を呼んだ。
冬馬の腰は容赦なく動き続け、美雨の膣を挟り上げる。

美雨は涙と涎で顔を濡らし喉を張り裂けそうなほど嬌声をあげる。

やがてソファに突き伏せられ、尻を高く突き上げられる。

そのまま背後から——硬い怒張が膣奥へと突き込まれた。

「ずっと……抱いてくれなかったから……私のこと、どう思ってるのか……わからなかった……でも……今は……っ」

パンツ、パンツ、と肉が打ち合う乾いた音。

バックからの激しい衝撃で、子宮を直撃されるたび、寧猛な快感に痙攣し、視界が真っ白に弾け飛ぶ。

「ああん！嬉しい！……そんな奥……っ、ひああああっ！」

背中を大きな掌で押さえつけられ、顔をソファに沈められる。

逃げ場はない。ただ、突き上げられるままに、膣を啼かせられる。

「……気持ちいい……っ！ もっと……もっと欲しいのっ！」

奥を突かれるたび、愛液が溢れて太腿を伝い、ソファを濡らす。

喘ぎと嗚咽と淫らな言葉が、途切れ途切れに漏れ続けた。

「また……いくっ……っ、あっ、冬馬あああああっ！」

冬馬はその締めりをさらに腰で突き崩し、容赦なく繰り返す。

何度も、何度も絶頂。

背筋を弓なりに反らし、乳房をソファに押し潰しながら、美雨は
快楽に沈んでいった。

やがて背後から腰を抜かれ、強引に引き起こされる。

硬く反り立つものは、割れ目を押し広げるように待ち構えていた。
ゆっくりと腰を沈めていく。

「やあっ……あ……っ！」

濡れ切った膣口が広がり、先端が奥へと呑み込まれていく。

全てを受け入れた瞬間、全身が痙攣し、背筋が大きく反り返った。

「んああああ……っ！……きもちいいの……っ！」

美雨の腰は快楽に負け、勝手に前後へと振り続けていた。

「……あつ……あつ……！ 擦れて……奥……あたって……っ！」
突き上げの衝撃で乳房全体がぶるんぶるんと跳ねた。

その淫らな光景に合わせるように、冬馬は下から荒く突き上げる。
正常位やバックで既に幾度も果てた身体が、なおも騎乗位で追い
詰められ、絶頂を重ねていく。

「……イクっ……イクううっ……またあつ……あああああっ！」
膣壁はぎゅうぎゅうと冬馬の肉棒を締めつけ蜜が溢れ出していく。
冬馬の下腹部はぐっしより濡れ、突き込むたびにぐちゅぐちゅと
いやらしい水音が部屋いっぱいに響いた。

「もっと……もっと欲しいの……！ もっとイかせてええっ！」
涙と涎を垂らしながら、腰を狂ったように振り乱す美雨。

その瞳は潤み、欲望に飲み込まれて赤く染まっていた。

「冬馬……っ、ああっ……中に……中に……中に……！」

甘く荒い声で、必死に懇願する。

「もうすぐお式だから……赤ちゃんできても……困らないよね……だから……お願い……中に……いっぱい出してえ……！」

ぎゅっと冬馬の首に腕を回し、美雨は狂おしく腰を沈めていく。

子宮口を肉棒の先端で挟られるたび、美雨は甘い声で叫んだ。

「出して……っ！ 出してえっ……！ 私の中に……冬馬、ぜんぶ

……ちょうだいっ……！」

次の瞬間、熱の塊が奥へ奥へと叩きつけられる。

灼けつくような奔流が、一気に押し寄せ、膣の奥を満たしていく。

止めどなく注ぎ込まれるたび腹の底が脈打ち、小刻みに痙攣した。
正常位、バック、騎乗位、そのすべてで果て尽くし、美雨はついに
力尽きた。

身体を震わせながら冬馬にしがみつき、涙混じりに囁く。

「うれしい……っ……やっと……愛してくれた……」

冬馬は最後まで一言も口を開かず、ただ黙して女を抱き尽くした。

朝。

窓から射す光に瞼を開けると、見慣れた天井が目に入った。
隣にいるのは、冬馬……のはずだった。

「……おはようございます、美雨さん」

低く落ち着いた声が響いた瞬間、美雨の血の気が引いた。
そこにいたのは、冬馬ではない。

冬馬の弟、宇高春樹だった。

「な、なんで……春樹くん……？」

シーツを慌てて胸にかき寄せる美雨に、春樹はどこか困ったように
笑った。

「……僕、親に頼まれて荷物を持って来てただけで……兄貴は急な